

1976.2.15

# Acu-journal

発行所 M・S・A会事務局

〒107 東京都港区南青山  
2-24-12  
(谷クリニック内)

編集兼  
発行人 谷 美智士

M・S・A会 (Medical Study of Acupuncture) 会報誌

## 会報発刊のことは

会長 間中 喜雄



こんどMSAの会報を出すはこびになりました。セミナーを終って針術を臨床に応用しはじめた各位がそれだけ前進し成長したことであって喜ばしい。

この会報は研究発表の機関であると共に同志の横の

連絡をとるための公報であってほしい。気楽に自分の感想や希望意見等をよせていただきたいものである。

Letters to editorという項目を作っていただきたい。

また研究会や学会の期日等もできるだけ広告して出席の便宜を計られたい。

研究といっても各科や各人の興味を持たれる方向は異なることと思う。小人数ずつStudy group を作って互に研修されることもよいであろう。時には硬いことはぬきにして遠くに遊びに出ることもよいでしょう。ともかく、日本の針灸研究の一つの核となることが出来ればよいと思う。

- 1) 古典のべんきょう
- 2) 診断学のべんきょう  
例えば脈診、腹診等
- 3) 電気生理学的研究
- 4) 耳診法
- 5) 知熱感度測定法
- 6) 外国との交流
- 7) 各科毎の針術の応用法

等々まだまだやることはどっさりある。

幸い今までセミナーを終えられた方々は熱心な方が多い。協力して研究するなら大きな成果が得られることは疑いない。

針術の診断学には数字で示せるようなものはない。五感に訴えて判断しているのである。

いわば名人芸の世界である。これを西洋医学のように俗人でも平均的な治療が行われるようになれば便宜であろう。こういう方向にも開発すべきことが多い。

日本では耳診法は普及していない。南米あたりでは針術並びに耳針法学会と並称している処もある位外国では重視されている。この方面の発展ものぞましい。ノチエは大抵の痛みは耳針だけでなんとか治せるという位である。

脈診も昔から中国の診断学の大切な見所であった。これももう少し客観化して誰にでも利用できるようにしたいものである。

以上のべたこと以外にもこれから我々がなすべきことは無数にある。この雑誌は初めは貧弱であってもよい。役に立つものなら次第に大きくなって行くと思う。そういう楽観的な気分で第一歩をふみだそう。

## 大学研究機関 とのかけ橋に!

副会長 谷 美智士

このたびM・S・A会会報創刊号の発行にあたり、会員の方々と喜びを共にしますと同時に、会発足以来お世話してきた私にとっても新なる感慨を覚えます。

M・S・A会とは間中喜雄会長が「Medical Study of Acupuncture」と命名されたものの略で、御承知の通り鍼灸実践セミナーを修了された医師を中心に結成されたものである。このときのいきさつについては、先ず、① 針医学が西洋医師には新しい医術である故、会員間に認識の差があり過ぎてはならない。② 個人の針医学に対する熱心さを計ることは実際は不可能なことであるが、一つの目安すとして講習料を支払ってお集まりの方々は、それなりの評価をすべきこと。

③ 各地で小規模に発足していた研究会は、入会があまりにも簡単であるため会員の自覚も薄く発展性に乏



しい。④ 何よりも大切なことは真に本当の意味での東洋医学的基礎にもとずいた研究会でありたいこと等がその主なる理由であり、これ等の点で間中氏と私及び沢津川氏との間で合意に達した。「たとえ会員は少なくとも地味に、ほんどうにやる気のある人が一人でも多く集まってくればよい」との意向の下に、昭和49年9月に正式に発足したものである。以後割合に順調な経過をたどり、研究会も第7回目を迎えることになった。

物事がなんであろうと進歩発展には誕生までの苦しみ、誕生の喜び及び成長のむつかしさという一つのサイクルがある。今度、会報が発行されるようになったのは、M・S・A会の発足に次いで2度目の喜びであり一つのけじめであると思う。したがって次にはすぐに成長のきびしさが待っている。この点を考えると、一応会報が出せるようになったとはいえ、会員はまだまだ150名足らずである。会員の方々一人一人が会報の編集者となられる自覚が望まれます。

さて会員の大多数はすでに多かれ少なかれ針治療、針麻酔を経験されたことであろう。そして多分、西洋医学とはかなりニュアンスの異なったものだと感じられたと思う。なかでも患者個人が医療の中に入ってくるパーセントが非常に多く、単に机上で論じたり、患者の意志を無視して医療を進めることは出来にくい。今までなら我々は患者との協議や協力なしにほとんど全ての医療行為を行うことすら可能であった。この点、忘れられた医療の一面として、又は医学の反省として東洋医学を見なおすことが出来ると思う。

現代医学は、あまりにも大学や研究所だけで、患者や実地医学のはるかに手のとどかない所で、悪く言えば研究のための研究として発展してきた面が多過ぎはしなかったか。もし現代医科大学が東洋医学を今までと同じ様に考えて事に当たったなら、真の東洋医学は育たないであろう。老人には老人の、子供には子供に合った針の打ち方がある。もっと厳秘にはその患者にだけ合った針がある。針の大学レベルでの研究を否定するものではなく、逆に大いにやってもらいたい、が、M・S・A会には敢えて大学、研究所と末端患者との仲介となってもらいたいと思う。大学と言わず無医村と言わず自由に大きく育てほしい。私は時々講演会等で医学部の方々とお話することがあるが、現在の

ところ先生方は針医学に関してはおっかなびっくりのようである。でも私はそれも良いと思う。現在ほど極端な状態は良くないが、彼等には実地医家の話しを聞くことは必要である。大学には大学としての任務があるように、M・S・A会は我が国有数の医家による総合的針医学研究団体としての自覚を持ち、広く実地経験から得たものを持ち寄り育て上げてあげること。流派にとられず、又追従することなく、自由な立場で医学界を啓蒙し得る会に発展していくよう希望したい。

## 現時点よりの脱皮 メカニズムの追求を!!

副会長 沢津川正一

ようやく創刊号にまで漕ぎ着いたことは、会員各位の盛りりと中央部のよき指導者、編集委員に深く感謝致す次第です。

2、3号で止まることなく、増々会誌の内容充実と永遠の遺産にし、全世界の東洋医学を志ざす研究者のよき参考資料になるものとして進んで行きたいものです。

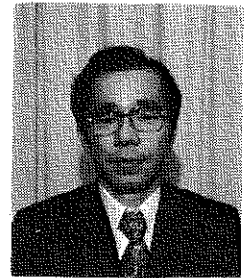
現在日本には様々な学会、研究所があり、その中でも特に多くの会員を持ち、内容も充実しているのは、日本東洋医学会と日本針灸治療学会であろう、両者はまた優れた内容の会誌を定期的に発行している。

今回、M・S・A会の会誌においては少数で優れた会員のみで新しい研究方法でユニークな内容を豊富にして、他の会誌の論文を上回ったものになるように願って止まない。

今後、増々セミナー等により優れた会員の増加と会の発展を期待したい。

東洋医学は漢薬、針灸、調気導引等の東洋で発達した伝統的医学である。その中で特に吾々M・S・A会で主軸をなすものは針治療学の研究である。針ほど多くの研究テーマを持ちながら、基礎的理論を作るにはなかなか困難極まりない点が多い、今迄、東洋医学はなぜ、効くかという基礎的理論の探求確立の努力を怠っていて技術面、治療面のみが研究が盛んのように思える。理論的確立を忘れては真の学術としての発展は望めない。

そこでM・S・A会、会員一同、一体となった協調ある研究こそ今後の発展への道かとも考えられる。



どこの針灸関係の学会会場でも見られることであるが、治療方法、技術方法も基本的には重要なものである。このような点のみの発表に興味を示し、またそのような発表が多い、ところが基礎的理論の研究発表となると、直接臨床に役立つないせいか、興味を示さないし、場合によってはそれがわからないからそれを無視したり否定さえもする。しかし、長年針灸の研究に精通し、その針灸理論の極限に到達している学識ある諸子は、そのような発表を待ち兼ねているし、個人的にもかなり研究している人でもある。

針灸は考えれば考えるほどに難しい壁に直面する。今迄のような考えでは針灸の前進は求められないであろう。今迄の考え方から逸脱した、次元を越えた方面より物事を処理し追求する必要があると考える。その中で東洋医学の真髄である自然哲学の大宇宙と小宇宙論の原理は再度見直す時期が来るであります。もう一つ基本的なものとして、生物、生命の原理追求まで考えてみるのもよい。生物とはあらゆる刺激に対して反応を示して生活体を維持する生きた物ということ

になる。ある刺激に対し、物理的、化学的に反応を示すと考えられるが、吾々生命体に起る反応等を何んで計り知るか、健康体と病体との反応の差、動物と人間との反応の差、個体差においても基礎的理論の追求には難問題が多過ぎる。今の所、これよりも末端の研究をテーマとしなければ何んらとらえることが出来ない。刺激物の量を計ることが出来ても、その量によってどの程度反応したかを計ることが出来ないが、主客的、現象面では何んらかの形で変化あることを知るから面白い。その反応を起すものとして理想的な物が針で、これほど単純な形をした金属一本で種々生体反応を来すことが出来ることを再三感心させられる。そこで問題となるのが技術、手技である。多いものを取り、少ないものを補い、少な過ぎても多過ぎてもならず、病氣と個体差に合せなければならぬ、これが針の技術であり手技であり針治療である。石の上にも三年というけれど今の世の中に通用するものはその道十年であり、十年も精通すればなんらかの形である域に達し自信持って対処出来るのである。

## この輝かしき針術を歯科領域に!! 松平邦夫

中秋の名月に、兎が餅を搗いていると言われていた童謡に見られる神秘の月を仰いで、少年の日、兎の姿を想像して眺めた月面に、近代宇宙科学は「ロケット」を打ち込んだ。年月を経ずして人類はその月の廻りで「アポロ」と「ソユーズ」を「ドッキング」させると言う快挙に成功した。

この輝かしき近代科学の進歩と発展の時代にもかかわらず、約3000年の歴史をもつ針の神秘的な謎は未だ解明されていないのである。

「針の科学99の謎」の謎は明らかにされていない。科学万能の現代ですら解明出来得ない針の神秘さに、私は、益々、畏敬と魅力を感じるのである。無限の可能性と神秘を秘めた一本の針に、驚異と感銘を深くしている今日この頃である。

針の神秘を解明することは学者達に任せ、私は、「もし正しく行われるならば……」さしたる副作用習慣性も無いこの針術を、日常歯科診療に応用し、歯科医師としての使命感と幸福感を味わっている。

勿論、未熟であり八方破れの思考錯誤の中で行われている我が針術ではあるが……。

この度、M・S・A会が輝かしい発展を遂げ、機関誌を発刊される運びとなった事は、全く以って喜ばしき事

で針術万才の快挙である。

編集責任者の先生方に感謝し、全会員こそって尊い治験例を発表され、針術の正しい発展と針を通じて医人としての友情と交流の庭とならん事を切に望んでおります。

歯科領域に於ける針術は「夜明け前」、であり歯科の東洋医学特に針術に於いてはM・S・A会が発祥の母体であります。現会員がすべて開拓者であると思えます。この輝かしい開拓の糸口と、発展の先鞭をつけられたのが福岡明氏であり、又「モダンゲンティスト」の最先端で活躍されている識家勝、渡辺敏雄、尾沢文貞夫妻、高橋泰雄、坂東晴男、辻塚智子等諸氏が、本基礎講座に参加された事は偶然とはいえ全く幸運の二字に尽きるもので、この事実は歯科界での東洋医学発展の為の重要な意味を持っていると信じます。

もとより私、浅学非才、針術の奥義を極めるは到底至難の業であります。数を誇る積りではありませんが、私と長男静邦医が、昭和48年6月以降、今日迄に簡単な針麻酔法に依る抜歯はすでに1500本以上経験した。又、針灸応用の治験例を簡単に記しますと次の通りであります。



歯痛が1～3秒で鎮痛、歯科に於ける「痛みの生理」を解決するのに3秒～15分以内にすべて鎮痛、或いは緩解、急性開口障害は1～3針で、時間にして3～5秒で開口可能、慢性的なものでも現代歯科医学では考えられない好結果を得ている。

抜歯後疼痛は一回の瀉血に依ってその激痛を瞬時に解決、その他「アフター」、嚥下痛、顎下「リンパ」腺痛、嘔吐防止、歯槽膿瘍、膿瘍切開、表面麻酔、歯石除去、即処、生PZ、三叉神経痛、根管治療、根管充填後の歯膜炎、抜歯後疼痛防止、小児歯科での応用、歯列矯正、歯痛に併発する頭痛にも卓効がある。最近特に好成績を得ている歯槽膿瘍、歯科「サイクル」療法、歯性急性炎症、慢性骨髓炎、放射線障害に依り発

現する開口障害、顎関節炎、咬合調整、総義歯等多数欠損印象採得前準備、歯科に於ける「ノイローゼ」等の、各電経療法にそれぞれ好結果を得ている。

以上、簡単に私達が経験した症例を列記した。紙面の都合で幾多貴重な体験と症例は割愛した。歯科に於ては、その応用範囲が80%迄の可能性があると言われた。現医科歯科大学の医・歯客員教授の言を借りるまでもなく、私は、針術の価値と可能性は、歯科治療学での応用範囲が、全くその80%以上であると信じます。発刊の輝かし、貴重な紙面を与えられた御好意に感謝し、諸先生方の御発展と、御幸福を祈って擱筆致します。時あたかも成人の日、初春の窓外に燦々と輝く太陽のもと小鳥集る庭を眺めつつ、針の友に、栄光あれと祈ります。

## M・S・Aのあゆみ(1)

第1回：昭和49年8月24日（家の光会館）

○間中喜雄先生 経筋運動（橋本式）を中心にその実際応用と、下痢や腎盂炎等に対するの治療法、皮肉針についての御講義があった。

これより前、先生御自身が松平邦夫先生のハリ麻酔により抜歯をうけられ、一同感嘆し乍ら拝見した。

第2回：昭和49年11月9日、10日（トラック会館）

○沢津川正一先生 電経療法のうち木経（頭・胸・腹・大腿・下腿）、土経（頭・胸・腹部）の疾患について述べられ、先生のシリーズの一環であった。

○谷美智士先生 サイクル療法が初めて吾々の前にベールをぬいて発表がなされた。新しい治療法のシステムを開発された先生の御苦心がしのばれた。

第3回：昭和50年2月10日、11日（市ヶ谷センター）

○高木健太郎先生 名古屋市立医科大学長でもある先生は斯界第一人者としてつとに名声が高いが、吾々M・S・A会員のため遠路はるばる来られ、先生の御研究テーマである圧発汗反射から針の作用機序に及び、全体的に考えるよりも更に局所の検討を行なう必要があるのではないかと述べられた。

○間中喜雄先生 各種治療法のうちM・K・K療法（長友氏）、飢点（耳点）を利用してやせる方法とか、先生の相変わらずお若い、柔軟なアイデアあふるる御研究

は吾々後輩の大きな希望であり、指針でもある。

分科会：1）児玉清先生 産婦人科で、帝切、無痛分娩、人工中絶について針麻酔を用いられたが、現段階ではもう一歩という処だという事であった。

2）岩橋信雄先生 毎回宮崎県より上京し、最前列で講義を受けられ、後方にいる吾々は先生の光り輝くオツムにいつも幻感(?)を受けている名物先生で、スライドを使用して先生の広大な病院施設、日常の針治療、更にハリ麻酔による帝切が地方紙に掲載された様子を拝見できた。

3）野村新先生 白十字病院における先生の多数例の報告とその効果が述べられ、その疾患も急性腹症、胃潰瘍、胃癌、喘息、肩こり等多方面にわたり御活躍の御様子であった。

第4回：昭和50年6月7日、8日（タカライス会館）  
癌の治療特集

○インターフェロンについて（北里研究所 小島ビールズ部長） ビールズの発育を抑制するのがインタフェロンで、その特性と産生物質について述べられ、癌細胞の発育抑制、免疫等から考えてこの方面の第一人者よりお話しをうかがえたのは有意義であった。

○黒木陸彦先生 くまざきより抽出したパンフォリンの紹介があり、作用機序は不明であるが、癌細胞の



3万ボルト通電状況

**ヘルストロン** (15,000V 30,000V)

### 高電圧負荷による全身通電療法

人体は電解質の水溶液といわれます。MEの観点からこの人体に独得の影響を与える新しい電界形成器です。

株式会社 **白寿生科学研究所**

事業本部 TEL 962-5671  
診療所 東京 虎ノ門、大阪 江戸堀橋

抑制作用があるらしいとの事で将来更に期待がもたれるとの事であり、心強く思われた。

○桑本秀崇先生 漢薬の瘡治験例についての御報告で各種漢薬成分、組成より分折し、くわしく御懇切にお話し下さり、更に現中国の情況と文献の紹介があった。

分科会：1 (大宅善衛先生 補導の電位変化という題で多数のスライドを用いて、針の作用機点という根本問題にせまる基礎的御研究で貴重な御研究であった。

2 (森万寿夫先生 前の大宅先生と同じく白寿会診療所における御研究で、先生の高電圧療法の一変法につき電気学的説明をなされた。

3) 坂東晴夫先生 歯科である先生が御研究を挙げ難治性の三叉神経痛についてその治療経験についてお話し下さった。

第5回 昭和50年8月23日、24日(タカライス会館)

○代田文彦先生 今や若手研究者として自、他にも許す先生が日産玉川病院での御経験として主に耳鼻科領域におけるハリ麻酔を中心として、歯科、婦人科まで及びその研究の広さと深さがうかがわれた。

○沢津川正一先生 電経療法の実際として消化器病(慢性肝炎、胃潰瘍、胃癌、便秘、下痢、内臓下垂、つわり等)についての療法が紹介され、その不断の御努力がしのばれた。

分科会：1 (谷美智士先生 寿王という薬の御紹介で、つかれとか、慢性肝炎その他いろいろに効果があり、会員も多くの期待をもっておききた。

## M・S・A一会員の感想

昭和47年4月、長年すみなれた福岡市(博多)を引きはらって東京に居を移すことになった。それは私自身昔からひそかにあたためていた東洋医学の学習という願望を実現する一好機がきたと感じたからである。

地方にいて東洋医学の大家の本を読んでいてもなかなか身につくそうにないので大家の多い東京に出たらあるいは手ほどきをうける機会もあるのではないかという淡い希望もふくめて年甲斐もかまわず冒険的東京にふみきった次第であった。

さて上京したものの、どこにどんな偉い先生おられ

○松平邦夫先生 歯科ハリ麻酔の第一人者である先生が中心となってこれからの歯科としてMSA会発展のためどう対処して行くか要望、その他について討論された。

第6回 昭和50年11月8日、9日(静岡サザンクロスホテル)

○石垣実弘先生 浜松医療センターでの甲状腺手術の針麻酔についての御報告で、甲状腺疾患の診断、分類、手術をのべられ、20例の針麻酔について扶突、合谷、内関等を使用し効果があったといわれた。

○間中喜雄先生 半側性と四半側性の針灸への応用という、一見難解な題であったが、先生の大きなテーマの一つであるイオンバンピング療法も紹介され、ツボのある点と体のある点とは相関があり、人間は体全体に相関した場を有しており、トポロジー的考え方も必要となって来ると淡々と述べられた。

○谷美智士先生 慢性肝炎の治し方という題で慢性肝炎をエネルギー虚(慢性的)、胃熱、全体に実証とに分けパルス療法、サイクル療法を用い、これに柴胡剤、瘀血に用いるもの、更に寿王を併用、効果があったと述べられ先生のお話しは会員に有益なる事大なるものがあつた。

○沢津川正一 内臓刺、長針、大針等古典的方法から洞刺について、更に自律神経失調、ノイローゼ等についてパルス療法を紹介され、電経療法について述べられた。

るのやらちつともわからないし、又どのように勉強をはじめたら能率的に学べるのかぜんぜんわからず悶悶の日々を送っていた。医道の日本社東京飯田橋分室に針灸道具を買いによつたとき、そこの小母さんが、小田原市で英語の針灸セミナーがひらかれることを教えてくれたので急におもいたって出かけてみた。そのおり始めて有名な間中先生におめにかかることができた。そして先生から医師を対象とするゼミが東京で行われていることを教えていただいた。そして多分第2回かの講座に参加することができた。

講師陣には医師であつて針灸を研究しておられる方が多く又針灸界の先達もおられるので針灸の専門家達

### ▶ 新刊 ◀

医家のための

# 針灸治療必携

A 5判 240頁 2,500円(千200円)

原著「針灸治療手冊」

上海市針灸研究所編

杉 充 胤 訳

医道の日本社

★中国で一番多く読まれた針灸指導書

★治効に直結する針感の徹底研究

★上海市針灸研究所の集団労作

●上編 各種針灸療法の基本知識

●中編 穴位

一般的な知識・常用穴(頭・顔面部37穴、胸腹部14穴、背腰部27穴、上肢部39穴、下肢部39穴)合計151穴

●下編 治療

●附録 経絡について・針灸治療の機序について・刺針の補導の手技について

主要  
目次

●横須賀市追浜町1-44 ●郵便番号237

●TEL(0468) 65-2161(代) ●振替東京163541

をはじめて知ることができ心から安堵した。

実をいうと福岡でも独学的に針の真似ごとみたいなことはやっていたが医師で針を研究しておられる人は寡聞にして知らなかったためさびしいおもいをしていた。針などやる人(医師)は科学者でないという侮蔑的というか冷ややかな眼で見られていたように思う。それでも自分の信ずるところがあり、西洋医学の臨床医としては大転換であるが、東洋医学への憧れは消えなかった。

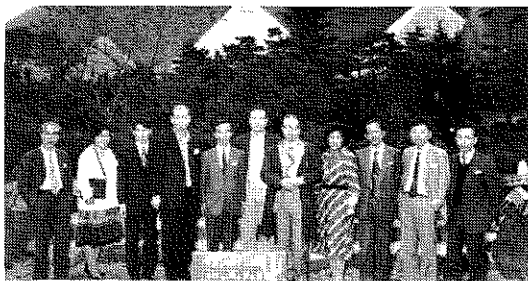
講座に参加してみると講師の先生方は、熱意をもって医師にもわかり易く経絡の初歩理論や臨床治療の実際などについて手ほどきをして下さる。聴講生は老若年令をとわず全国からはせきんじた医師や歯科医の方が多く、東洋医学をやろうという熱意の士で溢れているので、地方で何も知らないため感じていた、医師で針をやることの一種のコンプレックスみたいな気持は一気に吹きとんでしまった。間中先生の示唆にとむ講演をはじめとし、諸講師の先生から古典経絡理論の解説をきいたり針の実技供覧又実習、谷先生の新しく開発されたME器を使った経絡治療(電経)の話など私にとってのはじめて針の新世界をみせてもらっているような気持であり針の勉強をやらなくてはこの大きな刺激を与えられた。東京にでてきてよかったと真底から喜んだ。初歩段階のものにとって針灸の本質をつくことは大変むずかしいことだろうとは思いますが、古典針灸理論を尊重しつつ、一方、針というものを近代科学の眼で眺めてみることも大変興味深いことのように思われる。

MSAのメンバーは今後ますます増加するであろうし多くの方々から新しい研究や経験が発表されるであろう。針同好の士の集いとして、そこでは何をしゃべってもよく、お互いに教えたり教えられたりできる雰囲気の研究集団であってほしいと思う。将来は広く他の分野の専門家にも参集を願って針の学問的解明が一層進展することも願うものである。間中先生がよくいわ

れる、「臨床第一線の現場にこそ大学研究室などではみられない貴重なテーマがゴロゴロころがっている。それらについての科学的探究こそ我々に必要なのだ」と。  
虎ノ門白寿診療所 森 万寿夫

## 楽しんだ親睦会

秋もたけなわの11月初旬、第6回M・S・A会が静岡県伊東のサザンクロスで開かれた。今までは東京のビルの一室でいかめしく行なわれていたM・S・A会が趣きをかえて、観光地で開かれることになったのは多分に事務局の「あそびごころ」が働いたとしても、明日へのエネルギーを養うには良い方法であった。間中、石垣両先生の講義を何かいつもとは違う落ち着いた気持ちで、熱心に拝聴している風ではあったが、心の内は本人のみぞ知るといったところ。酒も少なかった



せいもあるが、翌日のことを考えてか、宴会も比較的静かなうちに終わったのであるが、翌朝の沢津川先生の講義のとき、何人かまぶたの重みに耐えかねている先生方をみかけた。何か後から聞いたところによると、ホテルの五階かどこかに美人の居るバーがあったとか。なるほど……

日曜日の朝八時、釣り、ゴルフ、観光とそれぞれ解放されて出発した。二人の先生が釣りに行ったが、その先生方にはその後お会いしてないので定かではないが、風の便よりによれば大漁旗を立てて、ご帰還なされ

祝創刊

当社は、昭和48年2月に創立された東洋医学関連企業です。  
東洋医学を研究される先生方のご要望にお答えするため、  
また、新しい情報を提供するために、日夜努力いたしております。

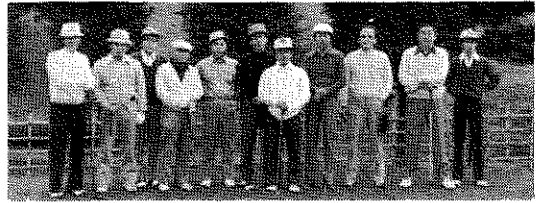
株式会社 オリエンタル・リサーチ

本社 東京都大田区鵜の木2丁目39-1-101  
連絡事務所 03-405-5716

たとか。一方、観光の方は、二人で大型車一台、運転手付きと新婚旅行なみのデラックス。もっとも大型車といっても色々で、米国製からタクシーまで、どれに乗るかは運次第であった。どっちにしても、ゆったりとしたドライブ観光とシャレこんだ。おもしろかったのはワニ園と世界中のランを集めている植物園。ワニ園では大小様々な種類がいたが、すべからく眠っているのには少々あきれたが、今思いかえしてみると連中がうらやましい気がする。そこで印象に残っているのがM先生。気持よさそうに腹を出して寝ているワニを何故かジーと見つめ立止まること十分。専門の麻酔とどうい関係があるのだろうかと思つたらぬことを考えた。秋も11月となると、十国峠附近はもうかなり寒かった。あたりも雪こそないものの、もう冬景色であった。先生方もコートの際を立てていたが、ご夫妻で参加された芦屋のM先生だけは寒さなんてなんのその、といった感じで、始めから終りまであてられ通し。

まあ色々なことがありましたが、どうにか予定より一時間程遅れて、無事熱海に到着した。

一方ゴルフ組は、石垣講師も交えて、日頃馴染んだ三



番針を三千番針程のクラブに換えての穴(ツボ?)入れ。気分がゆったりしたせいかわ、思感とはうらはらに穴のまわりを行ったり、来たりツボどころを得ない先生も続出。はては講師の先生まで白クイを越えて誤診、誤診。ともあれ最終成績は次の通りで、沢津川、谷両講師の実力はさすがとの声しきり。「初回だけは先輩に花をもたせた会員の方にもくい」との噂もあり。コースの不備からハンディキャップの決定は持ち越したが、次回を約して伊豆の山々を後にした。

普段はいかめしい顔つきで診療なさっている先生方も、この日だけは童心にかえり心安まる一日を過ごされたことと思う。(事務局)

#### 最終成績

優勝	沢津川 正一	ネット (71)
1位	谷 美智士	(71)
2位	町 秀夫	(72)
3位	石垣 実弘	(72)
4位	岩橋 信種	(76)
5位	坂東 晴男	(76)
B B	深谷 義裕	

## 歯科針治療余話

一見して木経の人と解る50歳の瘦せぎすの婦人である。私の医局の若き歯科医が、半年がかりで、Full mouthのOral Rehabilitationを行い、私が診ても、ほぼ完全な口腔状態となっている。……がである。

どうしても、5.7のHys (象牙質知覚過敏症)がとれないという。食事の時には、いつも、泣きたい思いたと訴える。5.7は健康歯でその歯については、全く充填物すらない。ただ歯頸部歯肉が、いくらか退縮している程度、P<sub>2</sub>の状態である。何回となくCBDを貼布しても、患者は苦痛を訴えている。

患者は、不眠症、自律神経失調症の診断で、二、三の有名医師、そして某高名鍼灸師に加療を受けているが、快方に向かうどころか、益々、不眠症は重くなっていくようだという。

私が診た時にも、前日の不眠のせいかわ、anaemischであり、総ての刺激にempfindlichであった。

恐らく、斯様な全身状態である為にも、疼痛閾値が下り、自律神経機能も不調を来しているであろうと、此のHysの処置に、針治療を試みた。

診断後の処置として;

- 1) 5.7にCBDの貼布。
- 2) 百会(-)、両側復溜(+)で、Tany Cycle Therapeutic Apparatus, MSA (For Experiment) によるサイクル療法。

## 福岡 明

3) 両側完骨に置針。

4) 左側下関(+)、視髻(+)、頰車(-) 右側曲池(+)、合谷(-)で、Tanyオリエンタルパルス (M I X II) による電経療法を10分~15分間を計8回行なった。

夜の睡眠は、以前より、「うつらうつら」出来るようになったと言う。

以後、隔日に来院させ、毎回、同様の処置を行った。

第二回目には、夜ぐっすり、疲れ切ったように眠れたという。

第三回目は、サイクル療法、完骨置針、電経療法を始めて5分後には、イビキをかいて眠り出したのである。

以後、隔日又は3日毎に、計3回同様の処置を行う中に、患者は「すっかり不眠症がとれました。お陰で、夜が楽しくなりました」と大変喜んでいました。そして顔色も赤味がさし、快活な話し振りに、傍のアシスタントも、担当ドクターも、余りの変わりように驚き入っていた。Blut Druckも、初診時には、最高100 mmHg以下であったものが、110~70 mmHgと正常値を示して来た。斯様に全身状態が好転してゆくと、5.7のHysもすっかりとれて、日常の仕事にも精が出るようになったという。

その後は、一週間から10日に一度来院させ、サイクル療法、完骨置針で10分間3~4回続ける途中、いつの間にか来院しなくなった。電話連絡では、仕事が忙しく、気分もよいので、うっかりサボってしまいまし

たと恐縮していた。然し、私にとっては、大変嬉しい返答であった。

[57]のHysの主訴の処置に、針治療を利用したのが、きっかけで、長年悩んでいた不眠症、自律神経失調症がすっかり治ったという。「瓢箪から駒が出た」話である。

然し、針治療はいつもこういうよい結果ばかりではないと思う。目的にそった針治療によって、思わぬ副作用が出ることも忘れてはいけない。

例えば、針麻酔による抜歯、歯痛止めには、ひびきの強い合谷という経穴を好んで選ぶ。そして、捻針、

雀啄、電撃等の強刺激を与えるが、果して大腸経に影響はないであろうか。歯痛は止まったが、烈しい下痢に見舞われたというケースも多いと思う。内庭を選べば、胃経の症状も出よう。

針は、ある病気の時には、著効があるが、ある場合には無効であるか、かえって病状が増悪する場合もあると先人も戒めている。

患者の主観的な種々の感覚、そして、患者の応答をあてにして行う針治療から早く脱皮して、一日も早く納得あるメカニズムの発見に努め度いものである。

#### M・S・A会会則

会長 間中喜雄 副会長 谷美智士 沢津川正一

- 第1条 名称；本会は、M・S・A会 (Medical Study of Acupuncture 針医学研究会) と称する。
- 第2条 目的；本会は東洋医学の研究・研修・指導及び会員相互の親睦を目的とする。
- 第3条 入会；本会への入会者は、原則として医療にたずさわるものとし、所定の研修を終了したもの、あるいは会員の推選により世話人会の承認を得たものに限る。
- 第4条 会費；本会の会費は年1万円とする。又、寄附行為はこれをこばまない。会計年度毎年9月1日より8月31日までとする。
- 第5条 役員；本会には次の役員をおく。会長1名、副会長2名世話人数名、及び会計1名とし、役員は総会で決める。
- 第6条 役員任期；役員任期は2年とする。但し再任を妨げない。
- 第7条 会員の失格；下記の場合は本会会員の資格を失うものとする。
- 1) 医学者としての行為に反する場合。
  - 2) 退会を申し出た場合。
  - 3) 1年以上会費を納入しない場合。
- 第8条 会則の変更；本会則の変更は、総会においてこれを行なう。本会の事務所は谷クリニック(〒107 東京都港区南青山2の24の12 Tel. 405-5639)内に置く。

#### 機械の買替えと、お考えでしたら

タカラベルモントの各種デンタル機器をお奨めします。合理性を追究して新しく開発したオール・エア・システムのデンタルユニットをはじめ、放射線障害に細心の注意を払ったデンタルレントゲンなど、意欲的な関連機器を用意しています。

#### 開業と、お考えでしたら

まず、タカラベルモントの営業マンにご相談ください。何かと煩しいことが多い開業準備の一切をタカラベルモントがお引受けします。全国130行におよぶ提携銀行のバックアップと、独自のD.P.S (デジタル・パッケージ)で、資金計画から設計・施工まで開業準備の一切を確実にスピーデに行ないます。



**タカラベルモント株式会社**  
本社/大阪市南区長堀橋筋2-1 電話(211)2831 大代表  
支社/東京都港区赤坂7の1-19号 電話(403)0311 大代表

#### あとがき

●長い間の懸案であったM・S・A会誌がやっと出来た。間中会長をはじめ、編集全員が何回となく集まり、甲論乙駁し乍らも、何とか創刊号をお手許に送ることが出来た。

何事も事始めには、新しい心構えや意気込みを持つものである。ただ問題点は、その氣力を、これからコンスタントに維持出来るかどうかにある。少なくとも本誌の立場では、M・S・Aの個性を十分に活かし、真剣な編集をやってゆきたい。

●間中会長は、本誌が研究発表の機関であるばかりでなく、セミナーを終えて針術を真剣に考えている会員の横の連絡をとる為の公報であることを望んでおられる。各氏から、いろいろ注文がつけられているが、これも会員の針術研鑽に対する情熱のみが解決するのである。

●会誌の名前については、さんざん論議した。結局、「Acu-Journal」に落ちついたが、仲々すっかりした名前である。命名の谷先生のセンスのよさがでてい。そして題字は、吾等がボス、間中喜雄会長の筆であることは勿論である。

●昨年の9月イタリアのフローレンスで開催された第一回国際疼痛研究学会にて、全会員が同意した研究課題として、

- (1) 疼痛の客観的測定法の開発
- (2) 頭痛の生理学的機序
- (3) 鎮痛 鎮静剤の作用機序 そして
- (4) 催眠術ハリ麻酔、電気刺激等による痛みの対処方法が挙げられ、特に「ハリ麻酔」の価値を一致して認めているという。実に私達、M・S・A会員の意欲をそそるコンセンサスである。

●版の大きさは、B5、8頁の記事は維持してゆきたい。総説、研究発表、海外トピックス、学会だより、M・S・A講演抄録、会員のひろば……等々、盛り沢山の抱負に、果して編集が、ついてゆかれるか？

会員諸兄の切なる御協力を願うのみ。

年2回発刊。

乞 御投稿。

(福岡記)

編集委員会

編集顧問

間中喜雄 澤津川正一

編集委員長 谷美智士

副委員長 吉元昭治  
三浦輝雄  
森方寿夫

副委員長 福岡 明  
松平邦夫  
渡辺敏雄